

平成26年度受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第
12
回

オーライ!ニッポン大賞



NPO法人東村観光推進協議会 (ほんもの体験型観光)



中津川むらづくり協議会
(企業研修の受入)



NPO法人喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター
(教育旅行の受入)



世羅高原 6次産業ネットワーク
高原地産地消のつどい

(スローフードフェスタ)



NPO法人エコ・リンク・アソシエーション
(民泊先農家のお手伝い)



小川作小屋村運営協議会
(郷土料理をベースにしたヒット商品)

「オーライ!ニッポン」とは

都市と農山漁村の間の“人・もの・情報”の往来(おうらい)を盛んにすることで、日本全国が元気(All right)になることをめざす国民運動「都市と農山漁村の共生・対流」のキャンペーンネームです。

第12回 オーライ! ニッポン大賞 講評

都市と農山漁村の共生・対流（以下「共生・対流」という。）に関する優れた取組を表彰するオーライ!ニッポン大賞は、今年度、第12回を迎えることができました。これもひとえに、現場で活動を実践されている皆様のご尽力と、関係7省をはじめ関連団体及び地方自治体等の関係者の皆様の温かいご理解とご支援の賜物であり、この場をお借りして心より敬意と感謝を申し上げます。

現在、政府におかれましては、魅力あふれる地方を創生し、地方への人の流れを創り出す「まち・ひと・しごとの創生」に取り組んでおられます。「共生・対流」は、都市と農山漁村を相互に行き交うライフスタイルを広め、都市と農山漁村の双方が元気を取り戻すことをめざす国民運動であり、その役割はますます重要になるものと存じます。

さて、今年度は全国からオーライ!ニッポン大賞122件、ライフスタイル賞15件、合計137件のご応募を頂きました。募集の周知にご協力いただいた関係者の皆様に改めて御礼申し上げます。

今年度のオーライ!ニッポン大賞は、長年の実績を有する中間支援組織からの応募が多いのが特徴でした。その中でも、質・量ともに大きな成果と効果をあげている取組み、隣接する地域や全国に活動が波及しているモデル性の高い取組み、これまでの実績に安住せず新規の分野への挑戦を続ける新規性の高い取組み、活動を通じて得た収益により常勤スタッフの確保に成功している取組み（農山漁村コミュニティビジネス）等が高く評価されました。

分野的には、農家民泊や教育旅行の取組みを中心に、企業研修や外国人旅行者の受け入れ、環境保全や福祉との連携、伝統芸能や郷土料理など伝統文化の継承、農業・農村の6次産業化など、多岐にわたっておりました。

一方、「学生・若者カツヤク部門」と「都市のチカラ部門」の応募が少なかった点は残念でした。「農山漁村イキイキ部門」として応募された取組みの中には、都市側の学校、大学、企業、観光、福祉などと連携した取組みも多くみられました。次回以降、こうした連携相手の企業や大学等からも、「学生・若者カツヤク部門」と「都市のチカラ部門」にご応募いただけることを楽しみにしています。

ライフスタイル賞は、都市部からの移住（U J Iターン）や、都市と農山漁村を行き来する2地域居住等を通じて、個性的で魅力的なライフスタイルを実践しながら共生・対流に貢献している個人を表彰するものです。今年度は、シニアから青壮年まで、幅広い年代から応募がありました。シニアからの応募は、個人の田舎暮らしにとどまらず、コミュニティ活動への参加はもちろん、様々な形で地域の課題解決に貢献している方からの応募が増えました。若者からの応募は、「社会のために生きる」という目的意識をもちつつも、自らのライフスタイルを楽しみながら等身大で取り組む姿勢が伝わってきます。今年は、40歳前後の働き盛りの皆さんが、スキルや経験を活かして地域貢献等をしている応募も多かったように思います。

審査委員会における選考の結果、オーライ!ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件、オーライ!ニッポン大賞4件、フレンドシップ大賞1件、審査委員会長賞2件、フレンドシップ賞2件、ライフスタイル賞5件の計15件を選定いたしました。

グランプリに輝いた「NPO法人東村観光推進協議会」（沖縄県東村）は、グリーン・ツーリズム（農業体験や農家民泊）、ブルー・ツーリズム（漁業体験）、エコツーリズム（自然体験）を連携させ、教育旅行を中心に地域資源を活用した「ほんもの体験型観光」に取り組む、前身組織の活動を含めて15年にわたる活動の結果、年間の売上は1億円余り、6名の常勤スタッフを確保するまでに成長し、その持続可能性が高く評価されました。隣接する大宜味村と国頭村との広域的な連携体制を構築し、今後のさらなる発展が期待されます。

その他の受賞者の皆さまに対するコメントは、受賞内容をご紹介する各ページに記載させていただきましたので、そちらをご覧ください。

惜しくも受賞を逃された皆様の中にも、魅力的な取組みも数多くございました。今後、さらに実績を積み重ねて、次回以降に再度ご応募いただきますよう、心からお待ちいたしております。

最後に、受賞者の皆様をはじめ、すべての応募者の皆様に対しまして、これまでの共生・対流に対するご尽力に感謝申し上げますとともに、ますますのご活躍とご発展を祈念いたしまして講評に代えさせていただきます。

平成26年11月4日

オーライ!ニッポン大賞 審査委員会
会長 安田 喜憲

第12回オーライ！ニッポン大賞 受賞者一覧

オーライ！ニッポン大賞グランプリ

1 沖縄県東村
NPO 法人東村観光推進協議会

オーライ！ニッポン大賞

- 2 山形県飯豊町
中津川むらづくり協議会
- 3 福島県喜多方市
NPO 法人喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター
- 4 広島県世羅町
世羅高原 6 次産業ネットワーク
- 5 鹿児島県南さつま市
NPO 法人エコ・リンク・アソシエーション

オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞

6 宮崎県西米良村
おがわさくこやむら
小川作小屋村運営協議会

オーライ！ニッポン フレンドシップ賞

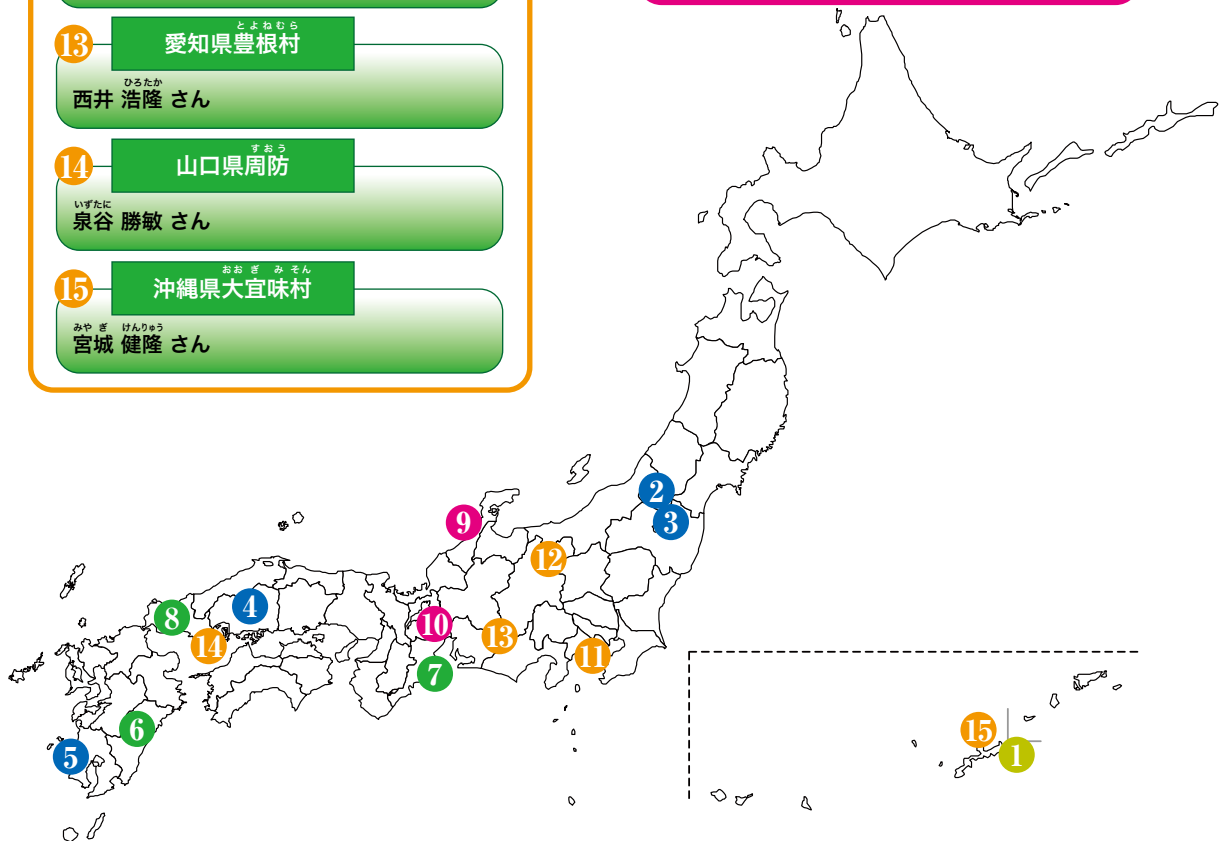
- 7 三重県鳥羽市
鳥羽市エコツーリズム推進協議会
- 8 山口県周南市
(株) 西京銀行

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

- 11 神奈川県横浜市
畦田 堅持 さん
- 12 長野県飯山市
柴田 さほり さん
- 13 愛知県豊根村
西井 浩隆 さん
- 14 山口県周防
泉谷 勝敏 さん
- 15 沖縄県大宜味村
宮城 健隆 さん

オーライ！ニッポン大賞審査委員長賞

- 9 石川県野々市市
石川県立大学「学生援農隊めぐり」
- 10 滋賀県東近江市
NPO 法人愛のまちエコ倶楽部



オーライ! ニッポン大賞グランプリ

ひがしそん
NPO法人東村観光推進協議会 (沖縄県東村)

内閣総理大臣賞



■受賞者の概要

活動年数：9年（前身組織の活動を含め15年）

活動日数：通年

登録会員数：78人

参加者数：年間13,000人、累計53,000人

■写真の説明

- ・農家民泊では、農作業の手伝いを通じて、農家の暮らしの厳しさ楽しさを伝える(左)
- ・本物の漁師が教える漁業体験は、魚の生態や調理方法も学べる(左下)
- ・地元ガイドとともに、カヌーでマングローブ観察。村の歴史や文化も解説する(右下)

■受賞の内容

本東村では、グリーン・ツーリズム（農作業や農業体験民泊）、ブルー・ツーリズム（漁業体験）、エコツーリズム（自然体験）が連携し、農漁家や地元ガイドが直接参加者と交流する「ほんもの体験型観光」に取り組んでいる。

平成11（1999）年、「東村エコツーリズム協会」を設立し、マングローブ観察、カヌー体験、トレッキングなどのプログラムに着手。平成12（2000）年、「東村ブルーツーリズム協会」を設立、漁業と観光の連携で釣り体験などを開始。平成13（2001）年、東村商工会内に観光コーディネーターを設置し、修学旅行生などが地元の住民から山や海の自然を学ぶ「やま学校・うみ学校」と、民泊を開始した。平成16（2004）年には、民泊組織「東村グリーンツーリズム研究会」を設立。グリーン、ブルー、エコの3組織の窓口を一元化するため、平成17（2005）年に東村観光推進協議会を設立、平成22（2010）年にNPO法人化した。

東村のグリーン・ツーリズムは、農業体験と農家民泊が特徴。パイナップルの生産量日本一の東村だが、収穫体験だけでなく、堆肥づくり、草とり、ビニールハウスの設置、選別・出荷準備など、農家が実際に行う農作業を手伝い、収穫の喜びと農作業の大変さを学ぶことができる。ブルー・ツーリズムでは、釣った魚の名前や生態、おろし方

も教え、郷土料理の魚汁を一緒に作る。子どもたちに農漁家や食に対する感謝の気持ちが醸成されている。

農業体験と民泊は、田舎の素朴さを売りにしているが、来訪者が安心して地域を楽しめるよう、旅館業法上の営業許可の取得はもちろん、各種の研修会等を開催して受入側の資質と意識の向上に努めている。（救急救命訓練、消防消火訓練、ハブに関する勉強会、郷土料理勉強会、歴史・文化の勉強会、平和学習、英会話教室など）

年々増加する受入依頼に対応するため、大宜味村と国頭村の行政、商工会、観光関連団体等とともに「やんばる交流推進連絡協議会」を設立して受入体制を拡充、3村で約360名の受入が可能となった。

村の最大の観光資源である豊かな自然を守るため、地域の美化活動、川や海の定期清掃と水質調査、赤土流出防止のためのグリーンベルト植栽活動にも取り組み、農漁家も率先して参加している。

現在、登録農家は60軒、漁家は10軒、エコツアー業に関わる人数は約40名。法人の常勤職員も、設立当初は1名だったが、現在では6名。平成25年度は年間延べ1万人が体験しており、1億円以上の売上があった。民泊時に使用する食材や燃料等の消費による間接効果もあり、村の経済や財政にも大いに貢献している。また、都市部から訪れる若い中高生の受入は、高齢者にとって生きがいにつながっている。



人口1,900人余りの村で、グリーン、ブルー、エコの3つのツーリズムを連携させ、地域資源を総合的に活用している点が高く評価されました。年間の売り上げは1億円余り、6名の常勤職員の法人に成長。隣の大宜味村と国頭村と広域的な連携体制を構築し、今後のさらなる発展も期待されます。

オーライ! ニッポン大賞

なか つ がわ

中津川むらづくり協議会

(山形県飯豊町)



■受賞の内容

飯豊山の麓に位置する飯豊町中津川地区には、恵まれた自然や昔ながらの里山文化が残されている。中津川むらづくり協議会は、中津川地区の全世帯122戸により構成され、ありのままの中津川を活かした地域づくりを進めている。

教育旅行は平成19(2007)年から継続的に受け入れている。9軒の農家民宿を中心に地区全体で取り組み、年間4～5校、これまでに1,750名の子どもたちを受け入れてきた。地元のおじいちゃん、おばあちゃん達が、どの子供に対しても自分の孫の様に接し、畑仕事や山菜採り、星の観察など地元の自然を共に体験することで子供達から喜ばれている。

企業研修は、(株)JTBコーポレートセールスと提携して実施している。参加した社員には、地域との触れ合いや里山での暮らしを通じて、コミュニケーション力の向上やチームビルディングなどの研修効果がある。また、地区にとっても、農作業やイベントの担い手不足を補う大きな力になると喜ばれている。企業と地域の双方の課題解決につながるプロジェクトとなっている。

昨年(2013年)からは、「食」を生かした体験ツアーも実施している。じゃがいもを3か月間、雪室に入れることで糖度が倍になる「雪室じゃがいも」、中津川の宇津沢地区でのみ生産される、栗のように甘い「宇津沢かぼちゃ」、中津川に群生するイタヤカエデの樹液から作る「国産のメ



■受賞者の概要

活動年数：39年（前身組織の活動を含め42年）

活動日数：年間104日

売上実績(農家民宿)：年間980万円、累計4900万円

参加者数：年間5,900人、累計120,000人

■写真の説明

- ・農家民宿を中心に地区全体で受け入れる教育旅行(写真上)
- ・旅行会社との提携で都市企業の研修を受け入れ(写真左下)
- ・地区固有の食材をテーマにしたツアー(写真右下)

イプルシロップ」といった、地域固有の資源を活用し、首都圏からの体験ツアーを実施するとともに、特産化やブランド化にも取り組んでいる。

外国人旅行者の受入にも意欲的だ。農家民宿では、「田舎に泊まろう」人気が高まっている台湾人、ブラジル人、国際交流の大学生などこれまで600人を受け入れている。今年から欧米人の受入体制の構築にも着手した。

昨年3月に学校が閉校し、10年間続けてきた山村留学制度が廃止となったが、都市部の子ども達との交流を継続したいと、今年から「中津川林間学校」と称して千葉県の子どもたちを夏休みに受け入れた。来年以降も実施する予定。

農家民宿のおじいちゃんおばあちゃん達は70歳を超える人も多いが、来訪者に地域生活を伝える先生として活躍し、生きがいとなっている。来訪者からの「こんなに良い所は他にない」という言葉に、住民は地域に自信と誇りを取り戻しつつある。

外部からの移住者も現れている。平成23(2011)年、緑のふるさと協力隊として派遣された隊員は、その後も定住し、中津川地区公民館の職員として活躍している。平成24(2012)年には、千葉県から夫婦が移住し、農家民宿の開業を目指して頑張っている。今年には鳥根県からご夫婦が移住し、地元の植物で草木染の特産品開発に挑戦している。



地区の全世帯の参加による地域ぐるみの取り組みにより、教育旅行、企業研修、地域固有の食材をテーマにしたツアー、外国人旅行者の誘致などに積極的に取り組んでいる点が評価されました。

オーライ! ニッポン大賞

NPO法人^{きたかたし}喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンター (福島県喜多方市)



■受賞の内容

「喜び多きまち」喜多方市は、平成15(2003)年、市としては全国で初めて「グリーン・ツーリズムのまち」を宣言し、「心の交流」を理念に掲げ、清らかさと癒しのある「心のふるさとづくり」を進めている。

喜多方市のグリーン・ツーリズムは、概ね旧村単位に設立された実践団体が住民主体で活動し、それを行政が裏方として支援してきた。活動の発展に伴って総合窓口の一元化の必要性が認識され、平成17(2005)年に喜多方市グリーン・ツーリズムサポートセンターを開設。平成21(2009)年にNPO法人となった。サポートセンターは、旅行会社や学校、個人等からの問合せ、相談、予約受付、手配、決済等に対応するワンストップサービス(総合窓口)の役割を果たすほか、先進地視察やセミナー等の人材育成にも力を入れている。実践団体は10組織へと拡大している。

平成20(2008)年、喜多方市が「子ども農山漁村交流プロジェクト」のモデル地域に指定されたことを契機に教育旅行の受入強化に着手。主に関東圏の小中学校を中心に、林間学校や修学旅行の受入を推進した結果、平成17(2005)年度に5,041人だったグリーン・ツーリズムの交流人口は、平成22(2010)年度には13,723人に増加した。

しかし、平成23(2011)年度は、東日本大震災に伴う福島第一原発事故に起因する風評被害により、農業体験等を



■受賞者の概要

活動年数：5年(前身組織の活動を含め9年)

活動日数：年間270日

売上実績(農家民宿)：年間約940万円、累計約1億3400万円

参加者数：年間約4,500人、累計約81,000人

■写真の説明

- ・首都圏を中心に教育旅行を受け入れ(写真上)
- ・10の実践団体が、各々個性的な活動を展開(写真左下)
- ・人材育成のためセミナーや先進地視察も欠かさない(写真右下)

予定していた50の小中学校がすべてキャンセルとなった。市とサポートセンターは協力して首都圏を中心に小中学校、教育委員会、旅行代理店などを訪問して回り、福島県や喜多方市の現状を正確に伝えるとともに、教育旅行のPRを進めている。平成24(2012)年度の訪問先は390カ所。昨年(2013年)は学校だけでも320校を訪問した。

風評被害を払しょくするため、首都圏を中心に、喜多方の米、野菜、果樹等の農産物のPR販売を実施。消費者に米の全量全袋検査や野菜のモニター検査を見学してもらうモニターツアーも実施している。

昨年11月、喜多方市で第12回全国グリーン・ツーリズムネットワーク福島大会が開催された。「ふくしまからはじめよう。～ふくしまの今!つなごうグリーン・ツーリズム～」をテーマに、福島県のグリーン・ツーリズムの回復と風評被害払しょくを訴えた。

こうした努力の結果、グリーン・ツーリズムの交流人口は、昨年度は4,493人となった。まだ震災前の3割強であるが、復興に向けた農家の意欲は強く、農家民宿の受入先が震災前の23軒から昨年度は41軒へと増加した。外務省の青少年交流事業などにより、東南アジアやアメリカなどの学生を4年間で延べ1,000人受け入れ、喜多方の魅力の世界へ発信するとともに、福島に対する風評被害の払しょくに貢献している。



地区ごとに設立された住民主体の実践団体を支援するため、旅行者等の問合せから決済までを一元的に行う総合窓口の機能を果たす等、模範的な中間支援組織として評価されました。原発事故に起因する風評被害の払しょくに向けた地道な取り組みも、評価されました。

オーライ! ニッポン大賞

せらこうげん 世羅高原6次産業ネットワーク

(広島県世羅町)



■受賞者の概要

活動年数：15年

活動日数：年間100日

ネットワーク会員の売上実績：年間約23億円、累計約158億円

6次産業関係入れ込み客数：年間約115万人、累計約997万人

■写真の説明

- ・理事の皆さん。理事の半数を女性が担っている（写真上）
- ・スローフードフェスタ（写真左下）や、世羅高原夢まつり（写真右下）などイベントも数多く開催。

■受賞の内容

昭和52（1977）年、世羅高原で広島中部台地国営開発事業が始まった。平成9（1997）年までの21年間に357haを開拓、19団地38農園の開発団地農園が造成された。しかし、技術・環境・販売などの問題から農園経営が行き詰まり、多くの法人が倒産に追い込まれた。また、旧来からの農業も高齢化や兼業化、担い手不足により衰退し、農地の荒廃が懸念された。

このままでは地元農業が壊滅してしまうという危機的状況のなか、農業の6次産業化を目指す生産者たちが集まり、平成11（1999）年7月に世羅高原6次産業ネットワークを設立した。ネットワークは、第一次産業を核に、第二次産業と第三次産業との総合化によって、所得と就業機会の増大を図り、地域社会の活性化と交流を促進することを目的としている。

年会費は3000円。会員は、生産農家をはじめ、加工・販売グループや農家レストラン、JAや地元の県立世羅高等学校など、世羅高原に存在する農業経営体が名を連ねている。結成当初の32団体が平成26（2014）年度現在では69団体となり、フルーツの観光農園10、花の観光農園7、加工グループ13、田舎レストラン3、産直市場3、直売農園22、集落法人8、高等学校1、農協1、福祉施設1と、多様な団体

により構成されている。また、理事の約半数を女性が担う等、女性の活躍もネットワークの特徴である。

ネットワークには、自分の商品を売りたいだけの人は参加できない。会員は、「地域全体を元気にしたい」という意識を共有し、6つの部会のいずれかに所属してネットワークの活動に主体的に参加している。

研修情報部会は、マネージメントセミナー（研修会）や視察研修などを開催。生産・商品開発部会は、世羅高原ならではの野菜栽培や特産品づくりの研修を実施。駅伝で有名な世羅高校と共同開発した「世羅っとした梨ランニングウォーター」は年間10万本以上を販売するヒット商品に。郷土料理部会は、地域に伝わる料理の掘り起しや地産池消のつどい等を実施している。体験交流部会は、親子体験教室のほか、農家民泊の受け入れを実施（広島大学のインターンシップや韓国の研修生など）。イベント部会では、春と秋に世羅高原夢まつりを開催。販売促進部会では、広島市内のアンテナショップへの出展等を実施している。

こうした活動の成果として、入込客数は60万人（平成9年度）から115万人（平成25年度）へ、売上は6億円（平成9年度）から23億円（平成25年度）へ、視察者の数は19団体435人から64団体1,600人（平成25年度）へと、飛躍的に増加している。



6次産業化に取り組む多様な団体（観光農園、加工グループ、田舎レストラン、産直市場、直売農園、集落法人、高校、農協、福祉施設）の連携・協力の下、人材育成、商品開発、イベント開催等、幅広い活動を展開し、年間115万人の交流人口と年間23億円の売上等、大きな成果をもたらした点が評価されました。

オーライ! ニッポン大賞

NPO法人エコ・リンク・アソシエーション (鹿児島県南さつま市)



■受賞者の概要

活動年数：14年

活動日数：年間220日

売上実績：年間約1億7000万円(平成25年度)、累計約5億7000万円

受入人数：年間19,484人(平成25年度)、累計59,263人

■写真の説明

- ・東シナ海をバックに教育旅行の生徒たち(写真上)
- ・民泊先の家庭で農業のお手伝い(写真左下)
- ・農作業のあとの昼食(写真右下)

■受賞の内容

NPO法人エコ・リンク・アソシエーションは、鹿児島県全域で農山漁村体験型の教育旅行に取り組んでいる。「鹿児島あったか民泊体験」という名のプログラムで、鹿児島の日常の暮らしを民泊先の家族とともに体験し、家族の温かさや心の交流の大切さを体験できる。また、海、山、川などの自然や、多種多様な農林漁業を体験し、「食や自然の恵みへの感謝」や「仕事の大切さ」を学ぶことができる。

代表理事の下津公一郎さんは、平成9(1997)年に南さつま市へUターン。故郷を活性化したいと考え、平成13(2001)年に法人を設立。これまで、森を守るための間伐講習会、サンゴの海を守るためのオニヒトデの駆除、川を守るためのアートによる環境啓発等、多彩な活動を行ってきた。

教育旅行は、法人が設立された平成13(2001)年から取り組みを開始。研修会、日帰りモニターツアー、先進地視察などを3年間かけて行った。当時は「本当にこんな地域で満足してくれるのか」、「お金をもらうほどのことができるのか」などの不安があった。農家や市民とともに、全国的な先進地である長野県の飯田市(第1回オーライ!ニッポン大賞グランプリ)を訪れたとき、農業体験や民泊を受け入れて生き生きと暮らす農家の姿をみて、「自分たちに

もできる」と確信し、平成16(2004)年、最初の修学旅行生360名を受け入れた。

民間主導の取組を行政もバックアップ。平成20(2008)年に南薩摩地域グリーン・ツーリズム協議会が4市でスタート。平成21(2009)年に県から民泊の指針が示され、平成22(2010)年に全県的な組織として「かごしまグリーン・ツーリズム協議会」が発足し、取組は県全域に拡大した。

現在では民泊の受入先は県全体で1,000軒を超え、受け入れ人数も年間19,484名へと発展した。法人の売り上げも年間1億7000万円となり、6名の常勤スタッフを確保できるようになった。

訪れる中高生は、田舎の家庭の温かさ等、生活の原点を垣間見て感動。地元の人は、子どもたちの喜ぶ顔や感想を聞くことで、改めて田舎のすばらしさや可能性を再認識し、自分の仕事や暮らしに自信を持てるようになった。生徒と親しくなり、手紙やメールの交換をする受け入れ先も増えてきた。

学校側も教育効果を高く評価。一例を紹介すると、「民泊先で問題を起こすのではないかと最も心配されていた生徒が、受入先とじっくり話をし、ついに自分の生き方まで話すようになったという。受入先と受入組織が信頼の絆で結ばれ、安全で教育効果の高い体験活動を支えている。



農山漁村の民泊型教育旅行の受け入れをゼロから着手し、県や市町と連携して全県的な受入体制を構築し、1,000軒を超える民泊受入先を確保し、年間19,000名を超える規模で受け入れ、6名の常勤スタッフを確保できるまでに成長した点等が評価されました。

オーライ! ニッポン大賞 審査委員会長賞

石川県立大学「学生援農隊めぐり」

(石川県野々市市)



■受賞の内容

「学生援農隊めぐり」は、石川県立大学の学生サークルで、農業の実体験と農村との交流を通じて、農業現場の現状と課題を認識するとともに、農村の伝統的な文化を継承することを目的とし、平成17(2005)年の大学開設以来、9年間にわたって継続的に活動している。

学内農園での農作業で経験を積みながら、能登半島を中心とした農村の現場に向かい、農作業、伝統行事、農産物のPR販売、ブランド化の構想づくり等に参加するなど、地域振興に大きく貢献している。

輪島市の白米千枚田(世界農業遺産認定)では、サークル設立当初から毎年、田植え、草取り、稲刈りなどを支援している。機械が入らない小さな圃場のため、すべて手作業で行っている。

津端町の俱利伽羅(くりから)地区では、畑を借りて野菜などを栽培している。

七尾市中島町の小牧(おまき)地区では、伝統行事の「出合いの虫送り」や「お熊甲祭り」に準備段階から参加。出合いの虫送りは、小牧と隣接する外(そで)地区が共同で行い、ムラ境で両地区の行列が合流するという、全国的にも珍しい行事。学生が書いた絵を広報用ポスターに活用されるなど、伝統文化の継承に貢献している。



■受賞者の概要

活動年数：9年

活動日数：年間70日

主な活動エリア：石川県野々市市、輪島市、津幡町、七尾市、能登町

現在の部員数：約60名

■写真の説明

- ・白米千枚田をはじめ県内各地で援農活動を実施(写真上)
- ・虫送りなど伝統行事の継承にも貢献(写真左下)
- ・集落の米のブランド化に検討段階から参加(写真右下)

能登町の当日(とうめ)集落では、昨年(2013年)から住民有志の「当日夢を語る会」が進める米のブランド化を北陸農政局の仲介により支援している。試食会に参加し、栽培方法や情報発信方法などについて意見交換を行ったほか、田植えや除草などの作業にも参加。これらの活動をめぐりのブログを使って発信している。今年秋、「清流で栽培当日の米」のブランドで販売を開始。年間100キログラム以上の購入者を「特別住民」に認定し、稲作体験に招待したり、山菜などの特産品を贈る構想もある。

こうした活動を通じて、地元からは「高齢者に活気が戻った」との声も聞かれ、喜ばれている。学生は、すべてボランティアで参加し、現地への移動も原則として学生側の車等で現場まで向かっている。地域貢献への想いと、学生生活を豊かにしたい等の目的で、参加している。

今年2月、「農業・農村を応援する大学生サークルネットワーク協議会」が発足した。この会は、北陸4県(新潟、富山、石川、福井)で農村支援をしている7つの大学のサークルのネットワーク組織で、めぐりは発足当初の幹事を務めた。今年の白米千枚田の田植には6大学から63名が参加した。今後も、サークル間で情報交換をし、互いに刺激し合いながら、積極的に農業・農村を応援していきたいと考えている。



サークルの設立から9年間にわたる活動の継続性、県内各地で農作業、PR販売、伝統行事、ブランド化など多彩な支援を行う多様性が評価されました。他大学とのネットワークも構築され、今後のさらなる発展が期待されます。

NPO法人愛のまちエコ倶楽部

(滋賀県東近江市^{おうみ})



■受賞者の概要

活動年数：10年

活動を担う人材の数：10人（うち専属スタッフ5名）

売上実績：年間約3,600万円（うち交流関係約700万円）

参加者数：年間約5,000人、累計約4万6000人

■写真の説明

- ・地域循環モデルの「菜の花プロジェクト」を推進。開花期には多くの観光客でにぎわう（写真上）
- ・梨やお茶の体験者からは、担い手も育った（写真左下）
- ・里山林の保全活動からは新たなビジネスも生まれた（写真右下）

■受賞の内容

NPO法人愛のまちエコ倶楽部は、東近江市の愛東（あいとう）地区で、「菜の花プロジェクト」という資源循環システムの中核を担いつつ、「田舎もん体験」や「里守隊」などの交流事業を展開し、新規就農や起業の支援、6次産業化などにも取り組んでいる。

菜の花プロジェクトは、菜の花の栽培、菜種油の搾油、廃食用油の回収、バイオディーゼル燃料の製造と利用という一連の資源循環を生み出すことにより、食とエネルギーの地産地消と地域の自立と自律をめざす運動。エコ倶楽部は、拠点施設「あいとうエコプラザ菜の花館」の運営者としてプロジェクトを推進している。

「菜の花プロジェクト」を学ぶ教育旅行や国内外からの視察は年間3,000人を超えることから、平成24（2012）年、愛のまち民泊推進協議会を設立し、現在までに5軒が農家民宿として営業許可を取得。昨年は教育旅行と視察研修で計299人の民泊を受け入れた。池田牧場等、市内の他組織と連携した研修ツアーの構築にも取り組んでいる。

「田舎もん体験」は、年間を通じて一連の作業を体験できる農村体験で、現在用意されているのは、米、味噌、ぶどう、梨、お茶の5コース。米づくりでは、種もみの湯湯消毒から、自宅での芽出し、手植え、手による除草、手刈り、はさがけ、脱穀、籾摺り、わら細工づくりまで、地域のお年寄りの指導を受けながら昔ながらの作業を体験。機械を

使った米づくりのコースもある。梨の体験者の中には、入門編を「修了」して担い手のいない梨園を共同運営する人も。現在、シニア層を中心に20組23名が、4つの梨園、計0.8haを共同運営し、耕作放棄地の発生抑止に貢献している。お茶の体験でも、今年1名の若者が担い手のいない茶園0.2haの管理を開始した。市、JA、生産組合等が協働で取り組む新規就農支援事業の事務局を任せられ、毎年1組程度の新規就農が生まれている。

「里守隊」は、荒れた里山の森林整備を毎月1回程度実施。チェンソーを使った本格的な整備で、薪や腐葉土の利用も行っている。リーダーは、活動が高じて薪と薪ストーブの販売店「薪遊庭」を開業。市内の「鍛造工房 室」とともにオリジナル薪ストーブを開発・販売している。

地元の家料理を集めて試食会を開催し、料理の「言われ」を聞き取ってレシピ集を作成。その成果は、昨年（2013年）開店した福祉支援型農家レストラン「野菜花」（のなか）のメニューにも反映された。野菜花は、エコ倶楽部の理事等の出資により開店し、障がい者の方が生産に携わった野菜や薪を店で使用するほか、福祉施設に食事を提供している。

昨年から一般の旅行者をターゲットとした取組にも着手。くだもの、歴史、菜の花、景観などのテーマで「田園（まち）歩き」のコースを10コース設定し、ガイドの養成にも取り組んでいる。



菜の花プロジェクト発祥の地で、10年にわたってプロジェクトの中核を担い続けるとともに、都市との交流を通じて新規就農や起業などの成果を上げてきた点が評価されました。民泊による教育旅行や研修ツアー、福祉との連携、田園（まち）歩きなど、今後の取組にも期待が高まります。

オーライ! ニッポン フレンドシップ大賞

おがわ さく こ や むら 小川作小屋村運営協議会

(宮崎県西米良村^{にしめらそん})



■受賞者の概要

活動年数：6年

活動を担う人材の数：27人（うち専属スタッフ14名）

売上実績：年間約2700万円、累計約1億円

来場者数：年間約2万5000人、累計約11万3000人

■写真の説明

- ・「おがわ作小屋村」のスタッフの皆さん（写真上）
- ・かやぶき屋根が特徴の「おがわ作小屋村」（写真左下）
- ・郷土料理をベースにした「おがわ四季御膳」は、年間1万食のヒット商品（写真右下）

■受賞の内容

小川作小屋村運営協議会は、自立・自走の集落運営をめざし、「平成の桃源郷」をキーワードに、自然、景観、生活文化を活かした地域づくりに取り組んでいる。公設民営の施設「おがわ作小屋村」の運営、「カリコボーズの山菜まつり」など地域資源を活かした活性化イベント、景観形成活動の「おがわ花見山づくり」などを行っている。

西米良村小川集落では、平成14（2002）年から18（2006）年にかけて実施された「自立した集落経営モデル事業」において、「平成の桃源郷 小川作小屋村づくり」の構想が企画された。小川集落は村内で最も高齢化率が高く（平成19（2007）年当時70%超）、「このまま何もしないでは、集落がなくなってしまうのではないか」との危機感もあり、構想の実現に着手した。

自治公民館組織の役員を中心に検討委員会を設置。研修や勉強会、ワークショップなどを重ね、平成21（2009）年に本協議会を設立。同年4月におがわ作小屋村がオープンした。現在、地域住民を中心に役員5名・会員26名が活動を行っている。

おがわ作小屋村の人気メニュー「おがわ四季御膳」は、西米良の郷土料理をベースとしながら、小皿16皿を並べ、目でも料理を楽しむスタイルとして差別化を図るなど、創

意工夫を重ねた結果、年間1万食が出るヒット商品となり、おがわ作小屋村への集客に大きく貢献している。

おがわ作小屋村の食堂で提供する食材はほぼ全て地元産を使用。「山菜まつり」や「月の神楽」など地域資源をテーマにしたイベントを開催し、「おがわ花見山づくり」は地元の花木の苗を植樹するなど、全ての取組において、地域資源の活用が図られている。

現在は集落を超え、村内の他の地域の加工グループ等の商品も扱うなど、村内他団体との連携や活動の幅も広がっているほか、小川集落の取組をみて村内他集落で独自のイベントを企画する動きも出ており、また、主催のイベントなどの際には近隣集落の地域婦人会なども率先して支援するなど、集落外の団体との連携の輪も広がっている。

昨年（2013年）1年間で26,000人が来場するなど、集落を訪れる交流人口が格段に増加し、住民の集落活性化に対する機運の高まりや自信が生まれるとともに、村外の人との交流により、新たな生きがい生まれ、精神的にも住民の活性化が図られ、集落の維持、自立した集落運営につながっている。また、UIターン者の増加により、高齢化率は今年（2014年）8月時点で約59%に低下、さらに、おがわ作小屋村の運営に伴い、昨年だけで約1,900万円が集落内に還元されるなど、地域経済にも大きく貢献している。



推薦団体：国土交通省（平成25年度地域づくり表彰）

オーライ! ニッポン フレンドシップ賞

とばし 鳥羽市エコツアーリズム推進協議会

(三重県とばし鳥羽市)



■受賞者の概要

活動年数：4年

参加者数：年間約2万8000人、累計約7万8000人（協議会会員によるツアー実績）

ツアーの催行回数：年間約2,500回、累計約7,000回（協議会会員によるツアー実績）

■写真の説明

- ・鳥羽湾の美しい海でシーカヤックを楽しむ（写真上）
- ・地元でしか味わうことができない「漁師の隠し魚」（写真左下）
- ・お茶を楽しみながら歴史や文化を学ぶ「エコツアーカフェ」（写真右下）

■受賞の内容

三重県鳥羽市は、世界で初めて真珠の養殖に成功した美しい海、独自の暮らしぶりを今に残す離島、恵み豊かな海女の文化などの地域資源が存在する。鳥羽市エコツアーリズム協議会は、「循環」と「連携」をキーワードに、「海を守る間伐」や「漁師の隠し魚」などの活動を通じて、地域の豊かな自然や歴史・文化の保護や魅力の向上を図りながらエコツアーリズムを推進している。

自然は、鳥羽市のエコツアーリズムの大きな魅力。豊かな海藻の森で生き物に出会うシュノーケルやカヤック、無人島の海辺での磯観察、夜の海で神秘的な海ほたるの光に癒されるツアーなどが人気。冬の鳥羽湾にはスナメリが訪れる。

漁師や海女さんとの交流や、新鮮な魚介類と、郷土料理の味も地域の宝だ。海女さんがとった天草でつくる鳥羽の「ところてん」は、サイコロ状に切ったきな粉をかけて食する独特な味。サメの身をみりん干しした「サメたれ」は、地元では酒の肴の定番商品。数々のカキ筏や島が織りなす鳥羽湾の景観も美しい。

協議会は、平成22（2010）年に設立。旅館やガイド、アウトドアなどの観光業に加え、農林漁業、商工業、自治組織などの各種団体、市・県など、多様な関係主体により構

成されている。

「海を守る間伐」は、海に面した山々で、林業会社がウバメガシの間伐し、薪作りを行い、地元の観光事業者などに販売する取り組み。薪の利用を通じて、美しく健全な山林と海を守ることが狙い。

「漁師の隠し魚」は、これまで市場に出荷されてこなかった未利用魚を「漁師の隠し魚」と名付け、エコツアーや飲食店などで活用する取り組み。地元でしか味わえないため、鳥羽市の新たな魅力として発信するとともに、市場への出荷を目指す取組も始まっている。

地元関係者への普及啓発も重要な課題。部会やシンポジウムの開催を通じた啓発活動に加え、市民がお茶を楽しみながら歴史や文化を気軽に勉強できる「エコツアーカフェ in 鳥羽」を定期的に開催している。

また、環境保全活動として、ミキモトグループから、ゼロ・エミッションの取り組みで育てられたハマユウの苗の提供を受け、地元漁業協同組合や旅館組合等と連携して植樹している。また、全国的に海浜への漂着ゴミが問題となるなか、無人島での清掃活動も実施。

鳥羽市エコツアーリズム推進協議会は、これからも自然と人間が共存共栄できるエコツアーリズムを目指し、今後も活動を発展させていきたいと考えている。



推薦団体：環境省（第9回エコツアーリズム大賞特別賞）

オーライ! ニッポン フレンドシップ賞

さいきょう
株式会社西京銀行

しゅうなんし
(山口県周南市)



■受賞者の概要

活動年数：2年

活動を担う人材の数：11人（うち専属スタッフ2名）

活動費用：年間約130万円、累計約230万円

参加者数：年間28人（平成26年）、累計52人

■写真の説明

- ・企業訪問と観光を組み合わせたパッケージツアー「若旅inやまぐち」（写真上）
- ・学生が企画から参加。学生の提案で清掃活動も（写真左下）
- ・「萩の地魚」など県内の魅力ある食や農林水産物を発見（写真右下）

■受賞の内容

山口県を主な営業基盤とする西京銀行は、全国の大学生を対象に、山口県内の企業訪問と観光を組み合わせた2泊3日の募集型企画旅行「若旅inやまぐち」を企画・実施している。金融機関と産官学が連携して地域の企業や観光の魅力を発見するこのツアーは、全国初の試みとして注目されている。

この取り組みは、県内人口の減少に歯止めを掛けるため、学生の意識を県内企業へ向け、県内で就労する意欲を高めることにより、定住人口の増加を図ることを目的としている。県内には、大手企業ほどの知名度は無いが、特色のある魅力的な優良企業も多い。そのような企業の現場を視察することにより、県内企業の認知を高めることを狙いとしている。また、県内の観光地を巡り、県産の農林水産物や食品を味わっていただくことにより、山口県の観光の魅力をPRし、交流人口の拡大にもつなげていきたい考え。

1回目のツアーは、平成25（2013）年9月11日から13日にかけて催行した。西京銀行と広島経済大学の共催、地元企業の協賛、中国運輸局、山口県、山口県観光連盟の後援を得て開催したところ、広島経済大学、山口大学、徳山大学から計24名の参加があった。

2回目は、今年（2014年）9月9日から11日にかけて、県内はもちろん、広島、福岡、京都、首都圏から、計28名の

参加を得た。今後も継続的に実施する予定。

企業訪問と観光を結びつけたツアーコンセプトは、広島経済大学と中国運輸局の協働で結成された「若旅プロジェクトチーム」が発案した。西京銀行は、このアイデアに着目し、山口県版の「若旅」を実施した。

ツアーの企画にあたっては、県内の大学から企画力と行動力のある学生を募り、観光地の選定、ツアー行程の立案、事前の下見などに参加してもらうなど、準備段階から学生の視点を取り入れている。

学生と一緒に検討する中で、若者が旅行するには、観光だけではなく、目的意識が必要であることに気づいたという。その一例として、今年のツアーでは、明治維新ゆかりの松陰神社での清掃活動を取り入れた。

昨年のツアーでは、萩市の（株）みどりやが経営するレストランで、「見蘭牛（けんらんぎゅう）」を提供し、好評を得た。萩市の見島（みしま）という離島には、日本古来の純粋な和牛として知られる国の天然記念物「見島牛（みしまうし）」が大切に守られているが、見蘭牛は見島牛を交配させた同社のオリジナルブランド牛。山口県には、このような農林水産物や食品などの地域資源が豊富に存在するが、全国的な知名度が得られていないものも多い。農商工連携や6次産業化への期待も高まっていることから、今後も農林漁業や食品産業との連携も強めていきたいと考えている。



推薦団体：国土交通省観光庁（第2回「今しかできない旅がある」若者旅行を応援する取組表彰）

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

財団法人日本SOHO協会事務局長 ^{うね} ^た 畦田 ^{けん} ^じ 堅持 さん (70才) (神奈川県横浜市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【二地域居住】(22年)

横浜市と静岡県河津町大鍋地区を行き来する二地域居住を
実践。

【地域での実践活動】(2年)

大鍋地区の活性化のため、空き家を活用したシェアハウス
を開始。

■写真の説明

- ・畦田さんご夫婦 (写真上)
- ・別荘は、遊び心を意識したこだわり設計 (写真左下)
- ・二地域居住で、子や孫とのキズナも深まる (写真右下)

■受賞の内容

北海道出身の畦田さんは、大手広告代理店で広告マンとして活躍。40代の後半にさしかかったとき、友人の別荘地の場所探しに同行した際、原野の中を澄んだ水が流れている様に田舎暮らしの想像力がかき立てられ、静岡県河津町の大鍋地区に土地を借り、別荘を建てることになった。

当時、キャンプを中心にアウトドアブームが到来し、仕事でも関わった。有識者とともに「本当に豊かな生活・環境とは何か」について考えた結果、自身のライフスタイルを変革する必要を強く感じ始めていたことが二地域居住を後押しした。以後、22年間にわたり、横浜市との二地域居住を実践している。

別荘の設計には2つのことを重視した。1つは、別荘をネットワークづくりの拠点とすること。そのために、9人が泊まれる遊び心のある設計とした。もう1つは、わざわざ時間をかけて河津町に出かけたくなる要素をつくること。たとえば、全室の梁をむき出しにし、思い切り吹き抜けにするなど、開放感を重視。風呂は思い切り足を延ばせるヒノキの浴槽。ダルマストーブと風呂釜に薪を使用。外壁材にガルバニウムを用いることで、メンテナンスの負担を少なくした。

その後、会社を早期退職し、SOHOと呼ばれるワーキングスタイルを支援するため、NPO法人ITイノベー

ション協会を立ち上げた。SOHOは企業に属さない個人企業家や自営業者などが情報通信ネットワークを活用して自宅や小規模な事務所で仕事をする就労形態のことで、その普及を通じて農山漁村をはじめとする地方への移住・定住にも貢献している。現在も、財団法人日本SOHO協会事務局長として、引き続きSOHOの普及に携わっている。

大鍋地区でも少子高齢化が進展し、二地域居住開始当時の60世帯が、現在は40世帯となり空き家が目立ち始めた。地域の元気を取り戻したいと考え、一般社団法人ルーラル・ライフを設立し、空き家を活用したシェアハウス事業に着手した。都市の若い家族が二地域居住できるようリーズナブルな価格設定で、4部屋からスタートした。

シェアハウスのオープンにあわせて、1泊2日の交流体験イベントを企画したところ、移住関係の雑誌に紹介され、地元テレビ局でも当日の様子が放送され、地元からも「地域のPRになった」と喜ばれた。イベントの運営は、孫も含めて家族総出で対応し、家族のキズナも深まった。

今後は、シェアハウスというビジネスを地域に普及させるなど、大鍋地区の住民として地域課題の解決に貢献していきたいと考えている。昨年(2013年)、介護ヘルパーの試験に夫婦そろって合格し、リゾート環境をもつ田舎町で、広くて快適な「サービス付き高齢者向け住宅」のビジネスを展開する夢ももつ。



22年間にわたって二地域居住を実践し、空き家を活用したシェアハウスのシステム構築や地域のPRなど、キャリアを活かして地域に貢献している点が評価されました。

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

(一社)信州いいやま観光局職員 柴田 さほり さん (36才) (長野県飯山^{いいやまし}市)



■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(4年)

農林水産省の田舎で働き隊への応募を契機に移住。

【地域での実践活動】(4年)

旅行業の経験を活かして、グリーン・ツーリズム商品の造成・運営などに従事。

■写真の説明

- ・海外からのお客さんの受入にも取り組む(写真上)
- ・地元高校生とともに酒蔵巡りツアーを企画(写真左下)
- ・古民家を後世に伝え残したいと「なべくら高原・古民家映画祭」を企画(写真右下)

■受賞の内容

名古屋市出身の柴田さんは、大学卒業後、大学の留学生センター勤務、国際ボランティア組織のボランティアリーダー、旅行会社のインバウンド業務勤務などの経験を経て、平成22(2010)年に農林水産省の田舎で働き隊に応募し、飯山市へ移住した。

移住した当初は、飯山市のグリーン・ツーリズムの拠点施設である「なべくら高原・森の家」に勤務して、都市農村交流の現場経験を積んだ。その後、信州いいやま観光局の営業企画課に移り、着地型旅行商品の造成と運営、PR活動のためのパンフレット制作、営業等に従事している。集落に暮らし、地域の人々に支えられながら、飯山市の里山や自然等の魅力に触れる生活を送っている。地域の人々との交流も増え、ゆっくりとお茶と漬物をいただきながら、おじいちゃんやおばあちゃんたちとおしゃべりする生活を満喫している。今年からは小さな畑も始めた。

仕事を通じて地域の人々と交流する機会が多い。わら細工づくり体験には地域のお母さん、かまくら作り体験では地域のお父さんたちの協力が欠かせない。

飯山の特産である仏壇を活かした新しい体験商品を開発したり、地元の学生と一緒に飯山ならではの旅行商品を開

発するなどして、よそ者の視点で地域の魅力を引き出すお手伝いをしている。

飯山市は、日本でも有数の古民家が数多く残る地域だが、高齢化に伴い、その数は年々減少している。古民家の景観を後世に残したいと考え、「なべくら高原・古民家映画祭」を企画・実施した。農山漁村や古き懐かしい日本を描いた映画作品を、古民家で上映するユニークな企画となった。

最近では、海外からの旅行者の受入の業務も徐々に増えてきた。ブラジルからのお客様が、80歳近いおばあちゃんに「わら細工」を教えてもらう場面では、おばあちゃんから「自分がこの歳になってこんなことができるなんて・・・」と言っていたとき、自分への仕事の自信ともなった。

趣味は旅行で、これまでに30か国を旅してきた。今でも、年に1度は海外に旅行し、外の世界で得た経験を、仕事に活かすことを心がけている。

北陸新幹線の飯山駅開業を来年(2015年)に控え、一人でも多くの海外からのお客様に飯山へ来ていただき、飯山の人と触れ合える機会を構築できるように、「i i y a m a」の自然、文化、人などの魅力を、海外に伝えていきたいと考えている。



旅行会社や国際関係の経験を活かし、農山漁村でグリーン・ツーリズムの企画運営に活躍している点が評価されました。訪日外国人旅行者を対象にしたグリーン・ツーリズムへの挑戦にも期待が高まります。

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

地域とともに生きる「山村留学指導員」西井 浩隆さん (33才) (愛知県豊根村)



■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(5年)

3年間の海外放浪の旅を経て、「日本一のミニ村」へ移住。

【地域での実践活動】(5年)

自給自足を目指すライフスタイルを実践しつつ、山村留学に従事。

■写真の説明

- ・山村留学生とともにカヌー体験(写真上)
- ・夏と冬の長期休暇には、都会の子どもたちのキャンプも受入。(写真左下と右下)

■受賞の内容

西井さんは、平成21(2009)年、豊根村の富山(とみやま)地区へ移住した。富山地区は、合併前は離島を除く市町村で最も人口が少ない「日本一のミニ村」として知られている。

移住のきっかけは3年間の海外放浪の旅。ニュージーランドとオーストラリアで、自然とともに生きている人々と出会い、感銘を受けた。「日本人のアイデンティティとは何か?」と考え、日本の伝統文化や山村での暮らしに深く興味を抱き、富山地区へ移住した。

移住後は、自然の恵みを活かした自給自足を目指すライフスタイルを実践。野菜を作り、川で魚をとり、山菜や木の実を採取し、きのこを栽培する。昨年(2013年)、狩猟免許も取得し、肉類も山から調達できるようになった。地域住民から借りた古民家に住み、薪ストーブや薪ボイラーの風呂を利用している。

また、NPO法人とみやま交流センターに所属し、山村留学の運営に従事している。現在は5名のスタッフと11名の子どもたちとともに暮らし、人々のつながりの強さや豊かな自然を生かした教育を実践。「お互いに支えあうことのできる社会」を目指して、子どもたちとともに学ぶ毎日を送っている。夏と冬の長期休暇には、都会の子どもたち約200名程度のキャンプを受け入れて、山村の魅力を知ってもらうプログラムを実施し、都市との交流を促進している。

地域では、660年以上つづく伝統行事「御神楽祭り」の氏子の一人として、準備から実施などの運営に参加。祭りは、十九種類もの舞が昼から深夜にわたって繰り広げられるが、西井さんも5年間、舞の練習を継続し、本番でも舞を披露している。青年団、消防団、PTAの活動にも積極的に参加。青年団の会長や地区の組長も任されるなど、地域の一員として頼りにされる存在になっている。

来年3月、地元の学校が閉校し、山村留学も休止されることとなった。このままでは、地域の子どもや、20~30代の子育て世代(現在10名)がますます減少してしまうのではないかと、西井さんは危惧している。地域への移住・定住を促すためには、地域の魅力(伝統文化、郷土料理、自然、住民の人柄など)を「見える化」して外部へ発信し続けること、行動を起こせるように住民間のコミュニケーションを深めることが大切と考えている。当面は、山村留学やキャンプ受入の経験を活かして、新たな交流イベントを企画、実施していきたいと考えている。

昨年、ともに山村留学に携わってきた女性と結婚し、地区としては16年ぶりの結婚式が地域の人たちの手づくりで賑やかに開催された。今年(2014年)8月には第一子も誕生。西井さんの夢は、家族とともに、地域の伝統文化や技術を学びながら、富山地区で自然に即した暮らしを続けていくこと。そして、地域の住民全員が「富山地区が好き!」と思える集落にしていきたいと考えている。



過疎化が進む山村の集落に移住し、山村留学の運営に従事しながら、山村の環境を活かした自給自足のライフスタイルを実践し、伝統行事の継承をはじめ、地域活動においても重要な役割を發揮している点が評価されました。

オーライ!ニッポン ライフスタイル賞

ファイナンシャルプランナー兼 泉谷 勝敏さん (40才) (山口県周防大島町)
ふるさとライフプロデューサー 泉谷 勝敏さん (40才) (山口県周防大島町)



■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(7年)

家族との時間を大切にしたいと考え、妻の実家がある島へ移住。

【地域での実践活動】(7年)

ファイナンシャルプランナーの資格を活かし、島に住む高齢者や、移住希望者の生活設計を支援。移住体験のツアー等も企画。

■写真の説明

- ・移住希望者の相談に応じる泉谷さん(写真上)
- ・移住後の暮らしを体験できるツアーも好評(写真左下と右下)

■受賞の内容

泉谷さんは大阪府堺市出身。「お金の振り回されないためには、お金の知識を身につけるのが一番。」と考えて、平成12(2000)年に金融業界に就職。営業成績は優秀で、昇格するごとに全国トップ表彰を受け、入社3年目に新規部門の責任者に抜擢された際は、わずか3カ月でチームを全国1位に導いた。しかし仕事の成功と反比例するように、家族との時間が少なくなり、「収入よりも家族との時間を大切にしたい」と考え退職。平成19(2007)年、妻の実家の周防大島へ移住した。

移住後は、広島市内の保険会社に勤務した後、独立。現在は、周防大島町定住促進協議会のふるさとライフプロデューサーとして、ファイナンシャルプランナーの資格と経験を活かし、高齢者のための相続セミナーや、移住希望者への支援活動を行っている。

移住支援の活動として、昨年(2013年)から、2~4週間の滞在プログラム「島暮ら荘(しまくらそう)」と、1泊2日の体験ツアーを開催し、移住者目線の企画として好評を博している。

島暮ら荘は、「少し長期に移住生活を試したい」というニーズに応えた企画で、町の「空き家バンク」などを利用した住まい探しや、町が開設した「無料職業紹介所」での

仕事探しのほか、「無料島人(しまびと)紹介所」を活用して先輩移住者から経験談を聞くことも出来る。定住促進協議会の移住相談窓口では、全国初のサービスとして、ファイナンシャルプランナーの泉谷さんが無料で生活設計の相談に応じている。一般的に、移住後は収入が下がることが多いため、リアルな田舎暮らしの資金計画が立てられるこのサービスは、移住希望者にとって心強い支援となる。

体験ツアーは「定住前に1泊2日の島暮らし—島時々半島ツアー」と銘打って実施。今年(2014年)6月に開催した第5回ツアーからは、既に9名が移住している。

都会の過剰ともいえるサービスに慣れてしまうと、島の暮らしに不満を感じることも多いかもしれない。このような現象を「サービス依存症」と名付け、「シマグラシS錠」というPRグッズを企画。「不便だからこそ、自分たちで工夫できる楽しさがある」として、島の暮らしに理解を求めている。

大阪に暮らしていたころは、近所づきあいも少なかったというが、移住して人の温かみや大切さを強く感じるようになったという。お年寄りが「ええ島じゃった」と終えることができ、島の子どもたちが将来「ええ島じゃ」と胸を張って言える元気な島を、地元と移住者が一緒につくることが泉谷さんの夢だ。



金融関係の企業で全国トップの業績をあげながら、家族との時間を大切にしたいと考えて島へ移住し、資格とスキルを活かして島に暮らす高齢者や移住希望者の生活設計を支援している姿が、新しいライフスタイルとして評価されました。

オーライ! ニッポン ライフスタイル賞

NPO法人おおぎみまるごとツーリズム協会理事長 ^{みやぎ}宮城 ^{けんりゅう}健隆さん (69才) (沖縄県大宜味村 ^{おおぎみそん})



■受賞者と農山漁村との関わり

【農山漁村へ移住】(9年)

定年を機に、神奈川県から母の実家がある大宜味村へ移住。

【地域での実践活動】(5年)

NPO法人おおぎみまるごとツーリズム協会の理事長として民泊事業をはじめとする地域振興に尽力。

■写真の説明

- ・Caféを開業。現在は休業中だが再オープンを目指している(写真上)
- ・教育旅行の民泊の受け入れを推進(写真左下)
- ・地元集落に自主防災組織を設立し、防災訓練を実施(写真右下)

■受賞の内容

宮城県石巻市出身の宮城さんは、東京の大学に進学。卒業後は都内の鉄鋼会社に就職し、中東諸国のプロジェクトにも携わるなど、37年間を鉄鋼マンとして勤務した。定年退職を機に夫婦二人でハワイへ移住しようと考えていたところ、母親から「(母の)故郷の大宜味村にある実家を継いで欲しい」と依頼され、「親孝行するなら今だ!」と一年発起。神奈川県から移住した。

本人、妻、娘の3人と、2頭の愛犬とともに、のんびりと暮らしを満喫していたが、眼下に広がるエメラルドグリーン的大海と、そのサンセットの絶景を、多くの人に楽しんでもらいたいと、移住2年目に小さなログハウスを造成し、家族3人でシーサイドに『ガーデンCaféメリ』をオープンした。「メリ」はフィンランド語で海を意味する。地元の方々にはもちろん、村外、県外、さらには海外からのお客さんにも楽しんでいただける店となった。

平成20(2008)年に、村が観光振興に着手することを知り、地域の同志とともに「おおぎみツーリズム地域協議会」を発足。村には宿泊施設が無く、通過型の観光地だったことから、先進地の南城市や東村から多くを学び、7軒で民泊事業を開始。平成22(2010)年から、協議会を「NPO

法人おおぎみまるごとツーリズム協会」として法人化し、その理事長に就任。民泊事業は、村の農村漁村生活研究会、婦人会、老人会、青年会、商工会、行政と連携し、農業を主体に展開。教育旅行のリピーターを確保しながら盛り上げてきた結果、現在では民泊が35軒に増加。高齢者の生きがいにもなっている。3村(大宜味村、東村、国頭村)の民間と行政により発足した「やんばる交流推進連絡協議会」の活動を通して、グリーン、ブルー、エコの3つのツーリズムが連携して、体験プログラムを開発、展開している。

平成22(2010)年、地元集落の区長に就任。東日本大震災の被災地である石巻市出身ということもあり、地元集落に自主防災組織を立ち上げ、津波や土砂災害を想定した防災訓練等を定期的に行い、防災意識の向上に努めている。

ガーデンCaféメリは、平成24(2012)年の台風15・16・17号の影響で、駐車場が使えなくなったため、現在は休業を余儀なくされており、平成28(2016)年度の再オープンに向けて家族とともに頑張っている。再開後は、一棟貸しのコンドミニアム型のゲストハウスとする考え。2020年オリンピックの東京開催決定と、「奄美・琉球」の世界自然遺産暫定リスト登録を契機に、外国人旅行者の受入にも取り組みたいと、夢はますます膨らんでいる。



田舎暮らしを満喫し、自らCafé(現在は休業中)を開業するとともに、NPO法人おおぎみまるごとツーリズム協会の理事長として、民泊事業をはじめとする地域振興に尽力する姿が、シニア世代のモデル的なライフスタイルとして評価されました。

第12回オーライ！ニッポン大賞の概要

●趣 旨

都市と農山漁村の共生・対流に関する活動を行いながら、交流の拡大や地域活性化に寄与した団体・個人、及び都市と農山漁村双方の生活や文化を楽しむライフスタイルを実践している個人を表彰し、その活動を広くPRすることで農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルの普及推進を図ることを目的としています。

●表彰対象・審査基準

オーライ！ニッポン大賞

「都市側から人を送り出す活動」、「都市と農山漁村を結びつける活動」、「農山漁村の魅力を活かした受入側の活動」等を通じて、都市と農山漁村の共生・対流の拡大に寄与した実績や効果の高い団体又は個人。

(1) 募集の対象

- ・学生・若者カツヤク部門 主に30代までの若者の活躍により推進されている活動
- ・都市のチカラ部門 主に都市側からの働きかけによって推進されている活動
- ・農山漁村イキイキ部門 主に農山漁村側からの働きかけによって推進されている活動

(2) 表彰の種類

オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）1件

※オーライ！ニッポン大賞と、連携表彰事業から推薦される「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」の中から1件が選ばれます。

オーライ！ニッポン大賞 3件程度
審査委員長賞 数件

(2) 審査の基準

新規性	農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
独自性	地域固有の資源や個性を活かした、オリジナリティ豊かな取り組みであること。
継続性	活動に多様な主体が参加・連携し、継続的な活動実績があること。
モデル性	他地域への応用や波及が期待できるモデル性の高い取り組みであること。
効果性	農山漁村地域を活性化する効果があり、今後も効果が持続して発現すると見込まれること。

オーライ！ニッポン ライフスタイル賞

UJターンにより都市から移住する等して農山漁村で魅力的かつ新たなライフスタイルを実践し、都市と農山漁村の共生・対流に貢献している個人。

(1) 表彰の種類

ライフスタイル賞 数件

(2) 審査の基準

新規性	農山漁村を舞台とした新たなライフスタイルを実践していること。
独自性	個性的で魅力のある活動であること。
継続性	新たなライフスタイルの実践に継続性があること。
モデル性	新たなライフスタイルが他の人の参考となるものであること

オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞・オーライ！ニッポン フレンドシップ賞

オーライ！ニッポン大賞の更なる普及を図るため、民間企業、民間団体、各省等が実施している表彰事業と連携し、オーライ！ニッポン大賞の趣旨に合致する案件の推薦枠を設けています。連携する事業主体から推薦された案件は「オーライ！ニッポン フレンドシップ賞」として表彰するとともに、その中から数件を「オーライ！ニッポン フレンドシップ大賞」として選定し、「オーライ！ニッポン大賞グランプリ」の候補とします。

第12回オーライ！ニッポン大賞審査委員会の構成

会長	安田 喜憲	立命館大学環太平洋文明研究センター長、オーライ！ニッポン会議副代表
	井上 和衛	明治大学名誉教授
	岡島 成行	学校法人青森山田学園理事長、公益社団法人日本環境教育フォーラム副会長
	長岡 杏子	TBSテレビアナウンサー
	中村 達朗	一般社団法人日本旅行業協会理事長
	平野 啓子	語り部、大阪芸術大学放送学科教授、オーライ！ニッポン会議副代表
	元石 一雄	NPO法人水と緑の環境フォーラム常務理事



主催：オーライ！ニッポン会議(都市と農山漁村の共生・対流推進会議)、農林水産省

協賛：一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構

後援：総務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、国土交通省、環境省、
一般社団法人日本経済団体連合会、全国知事会、全国市長会、全国町村会

オーライ！ニッポン大賞 事務局

〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町45番地 神田金子ビル5階

TEL 03-4335-1985 FAX 03-5256-5211 ホームページ <http://www.kouryu.or.jp/ohrai/> E-mail ohrai@kouryu.or.jp

「オーライ！ニッポン会議」の事務局を構成する 21 団体

(一財) 地域活性化センター	(公社) 全日本郷土芸能協会	(一財) 日本青年館	(公財) 日本修学旅行協会
(公財) 全国修学旅行研究協会	(公財) 育てる会	(公財) パブリックヘルスリサーチセンター	(公社) 日本青年会議所
日本商工会議所	全国商工会連合会	(一財) 伝統的工芸品産業振興協会	(公社) 日本観光振興協会
(一財) 地域開発研究所	(公財) 日本離島センター	(公財) 都市計画協会	(公社) 日本環境教育フォーラム
(一財) 農村開発企画委員会	全国水土里ネット(全国土地改良事業団体連合会)	全国森林組合連合会	(一財) 漁港漁場漁村総合研究所
(一財) 都市農山漁村交流活性化機構			